ショパール関節脱臼の1症例

長崎三菱病院整形外科

竹下 豊秋・瀬 良 敬 祐

岩 永 博 隆・梅 木 義 臣

長崎大学整形外科

乗 松 敏 晴

徳州会病院整形外科

茅 野 丈 二

A Case Report of the Chopart Joint Dislocation

by

Toyoaki Takeshita, Keisuke Sera, Hiroataka Iwanaga
and Yoshiomi Umeki

Department of Orthopedic Surgery,
Nagasaki Mitsubishi Hospital

Toshiharu Norimatsu

Department of Orthopedic Surgery,
Nagasaki University

Joji Kayano

Department of Orthopedic Surgery,
Tokusukai Hospital

Dislocation of the Chopart joint is uncommon and only a few reports have appeared in the literature. We are reporting a very rare case of plantar dislocation of the Chopart joint without fracture. The patient was forty-eight years old, who was injured by traffic accident. Roentgenogram showed plantar dislocation of the Chopart joint. Reduction was done by manual closed method. There are slight osteoarthritic changes now.

はじめに

症 例

外傷性足根骨脱臼はその解剖学的特徴から、比較的稀な外傷とされている。しかし近年交通事故などの増加に伴い、本症も増加傾向にあると思われるが¹⁾、距骨下脱臼及びショパール関節脱臼に関する報告は意外と少ない。

我々は昭和55年から昭和62年迄に足根骨脱臼及び脱臼骨折を6例経験した。この中で距骨下脱臼は昭和57年の本学会で茅野が報告したので今回はショパール関節脱臼に関し若干の文献的考察を加え報告する。

症例：48才 男性

昭和62年6月18日單車走行中乗用車と衝突し受傷。某医受診後即ちに当院紹介され受診。来院時右足関節から足部内側にかけての開放創を認めた。レ線的には舟状骨立方骨はともに距骨及び踵骨の関節面より下方に転位していた。以上よりショパール関節開放性脱臼と診断し直ちに Debridement 及び徒手整復を行った。整復は前足部を distal へ牽引しながら、距骨頭部を底側へ圧迫すると比較的容易に整復音を伴い整復された。図4、図5は整復後のレ線及び足部の肉眼像であるが、肉眼像でも整復前に比し明らかに足部の変形は消失し

ている。

術後6週間ギプス固定、以後アーチサポートを着用させ歩行を許可した。術後5ヶ月の現在足関節の運動制限軽度残存するも、殆んど痛みなく魚の仲買業の原職に復帰している。レ線的には距舟及び踵立方関節ともに軽度の関節症変化を認める。

図 1

図 2

図 1, 2 右足関節から足部内側にかけて開放創を認める。

表 1 距骨下関節の脱臼と骨折症例

昭和55年～昭和62年

① 距骨下脱臼	1 例
② ショパール関節脱臼	1 例
③ リスフラン関節脱臼 及び脱臼骨折	4 例

表 2 ショパール関節脱臼, 脱臼骨折の報告例

E. Friedmann (1958)	1 例
F. P. Dewar & D. C. Evans (1968)	1 例
浦野 良明, 原 晃 (1974)	8 例
B. J. Main & R. L. Jowett (1975)	71 例
滝川 宗一郎 他 (1980)	1 例
C. J. Sawyna 他 (1981)	1 例
赤坂 嘉久 他 (1985)	1 例

図 3 舟状骨, 立方骨は共に距骨及び踵骨の関節面より下方へ転位している。

図4 整復後の側面像であるが距舟、踵立方関節共に reduction位に戻っている。

図5 整復後の肉眼像である。
足部の変形が矯正されている。

図6 術後5ヶ月経過時のX-Pである。
距舟、踵立方関節共に軽度の関節症変化を認める。

考 察

ショパール関節は強い靱帯、腱に支持されているので、その脱臼及び脱臼骨折は稀で Main²⁾ らが71例、浦野³⁾ らの8例の報告はあるが骨傷のない純粋な単独脱臼報告は極めて少ない。

浦野³⁾ らはショパール関節脱臼の発生機序として①後足部が固定された状態で前足部の捻転を強制された場合。②前足部が固定され後足部の捻転が強制された場合。あるいは③前足部を内外転した状態で捻転が強制された場合を挙げている。我々の症例では患者が受傷時の状態を把握していないために受傷機序は推測するしかないが、前足部が固定された状態でショパール関節及び足関節に外反力が加わって生じたものと推測された。治療は早期に適切な診断をなし解剖学的整復に努める事が重要である。徒手整復の方法は De Palma が前足部を牽引しながら外転させ背側に圧迫すると同時に、距骨頭を底側に圧迫すると整復されると述べている。我々の症例は前足部を牽引しながら距骨頭を底側へ圧すと比較的容易に整復できた。しかし徒手整復は困難な事が多く、徒手整復を試み成し得ない場合は観血的に整復固定術を行う事は論を待たないところであろう。後療法は他の骨折の合併や、その程度で異なるが外固定6週その後アーチサポート着用し歩行という点で諸家の報告は一致している。合併症としては前足部の血行障害、planter nerve の損傷、感染、足部の変形及び二次的関節症変化などがあげられる。我々

の症例でも術後わずか5ヶ月経過時点で既に距舟及び踵立方関節に軽度の関節症変化を認める。将来的な経過観察を要するものと考える。

結 語

①今回我々は48才男性の開放性ショパール関節脱臼1例を経験したので報告した。②受傷機転は前足部が固定された状態で、ショパール及び足関節部に外反力が加わったものと推測された。③整復は徒手的に整復

可能であった。④Follow-up 期間は5ヶ月と短いが原職に復帰している。

参 考 文 献

- 1) 赤坂嘉久, 他. ショパール関節及び距踵関節脱臼骨折の1例. 関東整災誌. 第16巻3号: 320-324, 1985.
- 2) Main, B.J. et al.: Injuries of the midtarsal joint. J. Bone & joint surgery. 57-B: 89-97, 1975.
- 3) 浦野良明, 他. ショパール関節脱臼骨折. 整形外科. 第25巻1号: 127-135, 1974.